

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判  
三五二頁  
三五〇〇円  
連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使える  
本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式日 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

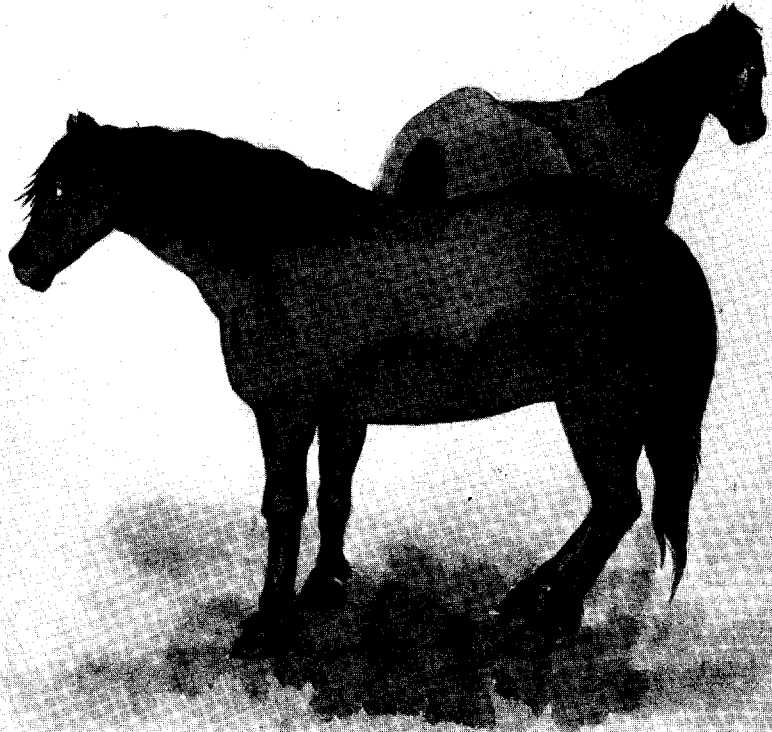
水原秋桜子編 二三〇〇円  
俳句鑑賞辞典  
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人  
まで二七〇人の古典的かつ伝統的  
な名句一〇〇〇を収め、豊かな実  
作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円  
現代俳句鑑賞辞典  
結社や傾向にとらわれず現代の代  
表的な俳人五〇五人の代表作一四  
六八句を収め、公平に客観的に鑑  
賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円  
季語辞典  
日本の季節にまつわる言葉やスモ  
ック・不快指数などまで収録し、  
春夏秋冬の四季に分類した。気象  
学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円  
難解季語辞典  
古典俳句に使われる季語は今日で  
は意味や表記が難解で正しい解釈  
や鑑賞ができない。本書はそれら  
の季語二千語を収め、解説を施す

# 連句 第29号 季刊



- 国語学大辞典 B5 19000円
- 国語慣用句大辞典 A5 6000円
- 国語慣用句辞典 B5 3000円
- 国語史辞典 B5 2000円
- 日本語語源辞典 B5 1800円
- 京都語辞典 B5 1800円
- 擬音語擬態語辞典 B5 1800円
- 隠語辞典 B5 1800円
- 近世上方語辞典 A5 2000円
- 花柳風俗語辞典 B5 1800円
- 新語新語俗語辞典 B5 1800円
- 難訓辞典 B5 1800円
- 名乗辞典 B5 1800円
- 名数数詞辞典 B5 1800円
- あいさつ語辞典 B5 1800円
- 新版こゝろ遊び辞典 B5 1800円
- 類語辞典 B5 1800円
- 類義語辞典 B5 1800円
- 表現類語辞典 B5 1800円
- 新版文章表現辞典 B5 1800円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2

「暴落」と「じり安」(南柏雑記 27) ..... 1  
 風雅考 — 芭蕉遺語をめぐる ..... 片山多迦夫 ..... 2  
 おもひ切たる死ぐるひ ..... 佐藤 廣幸 ..... 4  
 「鶯の羽も」の巻鑑賞(Ⅷ) ..... 東 明雅 ..... 8  
 「衰虫」付勝練習二十韻 ..... 12

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第三十三回猫養会

第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第 ..... 14  
 二十韻 ..... 捌・文 中川 哲

第二部 二十韻 八巻 ..... 捌 東 明雅 金久保淑子  
 馬場 彬風 篠原 達子 蒲原志げ子  
 八角 澄子 中田あかり 佛淵 健悟

胼胝は知っている ..... 式田 和子  
 — 執筆始末記 —

関口連句教室 歌仙 捌 東 明雅 ..... 21  
 遊喜の会 歌仙 捌 中田あかり ..... 22  
 ころも連句会 歌仙 捌 矢崎 藍 ..... 23  
 大和路旅行吟 歌仙 膝送り ..... 24  
 柏連句会 二十韻三巻 捌 東 明雅 小林しげと 五十嵐譲介 ..... 25  
 白金連句会 捌・文 下鉢 清子 ..... 26  
 芭蕉連句に現われる経済のこと ..... 福井 隆秀 ..... 27  
 雁 帛 往 来 ..... 29  
 新刊紹介 ..... 18

表紙(木曾駒) 宮崎龍火子

# 「暴落」と「じり安」

南 柏 雑 記 27

雅

四月十五日、先師芦丈翁の二十三回忌追善法要をして追善連句会がゆかりの伊那市からむし庵で興行された。主催は芦丈先生愛孫の美紗さんと、現存芦丈門の最先輩でからむし庵連句会代表の宮脇昌三氏。私も御案内を受け参加したが、折しも伊那谷は梅、桃、櫻、辛夷、連翹が真盛りで、まるで桃源郷を行く心地、久しぶりのからむし庵も昔のままで懐しかった。

下に掲げたのは、当日私からむし庵連句会の方々を連衆に捌いた一巻である。追善俳諧の心得については「連句辞典」九〇頁に記載があるが、禁句として「迷う」・「暗い」・「落ちる」・「鬼」・「犬」・「もゆる」・「苦しむ」などがあげられている。これはみな亡き人の冥福を祈る気持のあらわれに外ならない。ウ5「じり安の株をかかへて不眠症」は、はじめ「暴落の……」であったが、連衆のお一人に指摘され「落」の字を嫌って、「じり安の……」と改めたものである。芦丈先生直系の連衆であるだけに、流石と感嘆したものである。

## 半歌仙 故里や

東 明雅 捌

故里や土掘れば土の暖かき  
 軒に明るき巢燕の声  
 新入生下宿の部屋の気に入りて  
 きなこだんごを大皿に盛り  
 連山の威儀整ひぬ月の影  
 露しつとりと置ける草むら  
 秋深き絵島の墓をふし拌み  
 ブルートレイン放浪の旅  
 赤腹舌チヨロチヨロとみやげ店  
 収賄事件うやむやのまま  
 じり安の株をかかへて不眠症  
 神も留守なり呑むジンの味  
 月と灯が雪と睦める高樓に  
 己が魅力を知った唇  
 ふっとまた逢へる予感のイヤリング  
 ブランコに乗りありったけ漕ぐ  
 評判の万国博は花盛り  
 猫も杓子も春風の中  
 平成二年四月十五日  
 於 伊那市からむし庵

芦丈 仙  
 明雅 捌  
 敬一郎 万津子  
 友子 子  
 惠美子 子  
 路代 子  
 澄子 子  
 津代 子  
 郎 子  
 雅 子  
 友 子

風雅とは、デモニーニッシュなものである。近代の言語では説明し難い日本独自の美的精神構造の如きものであろう。こゝでは、芭蕉遺語を通してわたしなりに風雅について考えてみたい。

句文に風雅と言事忘るべからず。さび・しほり・細ミ・しほらしきといふは風雅なり。

この心がけなければ、或は平話の句はたゞ事になり、或は無骨、或は野鄙に心賤しく、又道理に落ちて俳諧連歌の本意を失ふ事、道におもて大切の事ならん。

(山中問答)

俳諧の連歌の本意を失った作品例は連句年鑑誌上で沢山見ることが出来る。故清水瓢左翁云く、自分の盆の窪は見えないの譬えの通り、自らよしとする大天狗、小天狗が何と多いことか、と。別に俳諧(発句と連句の総称)に限ったことでもあるまいが、悲しい現象である。

玄妙の附

脇を附る時は発句の風情又一しほいさぎよくなるを脇の手がらとするなり。末々に至てもおなじ心なり。五ッ脇の法、七名八鉢の附合など、いふ事はなし。△是等は支考が言はじめし也▽(芭蕉伝書集二・北枝考)

見つけたり廿九日の月寒き  
と向ふをつけたり。此句の外、向ふの姿にして今一句風情よき句有べきにあらず。玄妙の附なるべし。

(芭蕉伝書集二・北枝考)

趙北枝先生は刀劍の研ぎは拔群だが、文を磨くことは不馴れと見えて、之は悪文の見本みたいなもので理解に苦しむ。流石わが九代前の師匠であると言いたくなる。向ふ・手前とは遠近の意ではなく、「向う」は叙景(人情なし)を、「手前」は人情の句を意味するものと解する。これら蕉翁の教えがやがて自他伝に於て、『自・他・場・あしらい』の明快な附合法となって北枝に結実したと考えると誠に興味深い。

風雅の核

飛花落葉の散りみだるゝもその中にして見とめ、聞とめざれば、おさまるとその活きたる物だに消えて跡なし。物の見へたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。(三冊子)

何気なく読み過ごしてしまう平易な言葉であるが、之は蕉翁俳諧一代の獅子吼と思える程の重さをもって迫ってくる。これほど説き難き風雅の核心を説き得たものも少いだらう。正に物が見えてくるのは見止め、てくれることを待っている物があるということである。この核心を踏み外すと、俳諧は単なる遊びに終ってしまう。『瞬間のうちに消えながら、永遠であるものが実存である』(ヤスパース)とは東西と時代を遙かに隔てた哲学者の語である。

瓢左、梅遊両師も対吟中つねに、前句の光をかゝげる句後へ渡せる句を附けよと言われた。同じ心であらう。一見して蹟くのは、同じ北枝の山中問答に、脇に五つの附方あれども、是皆附ようの差別にして、趣向を求むにあらずとあって、はたして蕉翁は五ッ脇の法などを説かれたのかどうか迷う点である。わたしの臆測では、この二文は同じ元禄三年の記としても時間的にかんがりのズレがあつて、このズレの間に何らかの事情が発生し、敢えて、是等は支考が言はじめし也」という否定句を挿入したのではないかというのである。北枝の三つの文は、山中問答がまず成立して俳諧の理念を示し、次に北枝考で基本的な方法論を説き、最後に附方自他伝に於て初めて実作者のための附合法を案出したものと考えると論旨が整合してくると思う。

力の筋をつぎし中の子

さゝなみや三井の末寺の跡とりに

高ひくのみに雪の山々

爰へ向ふを附ねば添悪し。手前を附る時ハうち越の手前ゆへ手前の事は甚悪く、向ふ附る時は鳥飛行か、松柏の立木敷、又は月か星成るべし。其中にも月こそ打添の姿情調ひたるべし也、

俳諧の行方

日本の詩歌俳諧を代表する三つの選集はそのまゝ、美の変遷、風雅の歴史を示している。第一に万葉集、第二に古今集、第三に芭蕉七部集である。七部集成立後三百年の間に光芒を放つものは僅かにホトトギス雑詠選集(明治四十一年から昭和二十年までの虚子選句集)位のものであろうか。多年俳諧すきたる人よりは、外の芸に達したる人、はやくはいかに入る。(宇陀法師)

俳諧は三尺の童にさせよ。(三冊子)

これからの文芸の世界は超近代的なものと今日的なものが相剋し、あらゆる文芸のジャンルがその形を喪つて交錯する乱世の時代ではあるまいか。近代詩に行きつまった詩人が俳諧にその躰を紛らしているのはこの前兆である。

今後、映像作家や音楽家、或はジャーナリスト、或はエトランゼ等々との広い風交が必要となるであらう。その拡がりの中で俳諧は崩壊するかもしれないし、逆に新しく俳諧の精神と方法が鍛え直されるかもしれない。マンネリズムと自己満足の日々否定しながら、風雅の魔心の命ずるがまゝに勇ましく進むよりはかないだらう。

口をとおむとすれば、風情胸中をささひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。(栖去之弁)

(一九九〇年立春の日記す)

# おもひ切たる死ぐるひ

佐藤 廣幸

いまや別の刀さし出す  
せはしげに櫛でかしらをかきちらし  
おもひ切たる死ぐるひ見よ

去来  
凡兆  
史邦

右は『芭蕉七部集』の一つ『猿蓑』の中でも有名な「蕉の羽も」の巻、名残の表八句目から十句目までの特によく知られた三句の涉りで、丁度現在、本誌上で、この巻の明雅先生の名鑑賞が連載され、関西に住む私をも居ながらにして、先生の名講義が拝聴できる仕合せを有難く感謝しております。従って、私如きものが今さらこれに論評を加えることの愚かしさを百も承知しながら、この歌仙については長い間、深い愛着をもって親しんで参りましたので、愚行とは知りつゝ、この様な駄文を草しました。この巻の名残の表の一連は既に明雅先生がその名著『芭蕉の恋句』(一五七―一七二頁)の中で実に詳細にわたって委曲を尽して説かれている通り、芭蕉連句中の最大の傑作の、最大のヤマ場として最も光彩を放っている佳処であります。先生が力説されている「逆茂木」は私の頭にしみ込んで離れないほど何度も熟読いたしました。

私は若いころから独りコツコツと幸田露伴の七部集評釈

を便りに、芭蕉の連句の世界を辿っていましたが、そのうちに露伴の解釈に不審な点を幾つか見出し、あきたらなくなり、特にこの巻の「おもひ切たる死ぐるひ」の解釈には直感的に反撥を覚え、惘然たる思いを抱き、蕉風連句のよりよき指導者を求め遍歴の旅が続き、それが私を露伴から引離すことになりました。そして遂に東明雅先生の説得力のある優れた鑑賞法に出逢う幸運に恵まれました。先生の鑑賞法は、これまでの注釈者と違い、主観的、印象的解釈を排し、連句の実作体験に基づく追体験による制作心理を大切にしたり、作品の制作と享受が表裏一体をなす、分析的解釈―付心・付味・三句の転じ等―の機微に触れた啓蒙的な懇切な解説は、先生独特のもので、全くその解説には魅了されました。

この「蕉の羽も」の巻の名残の表の一続きは、明雅先生の御指摘通り「人情の句をうまく三句の転じを果しながら」と続け、一巻の興を盛り上げる「逆茂木」と称される名場面をつくりその緊迫感がひしひしと身にせまってくるのに反し、露伴の評釈からはそうした高揚した感動は全く伝わらず、ただ史邦の付句の人物を女性とみるか、男性とみるかに迷い、前句の凡兆の「せはしげに」の句を「海道又は

山道のおじやれ飯盛などの「蓮葉女と解し、史邦の付句の「おもひ切たる死ぐるひ」する人物を「思乱れたる女」と、全く軌道を逸脱した解釈に走り、嘩然たる感じをいだかせ、「思ひ切たる死ぐるひ」という言葉から下賤な女の破れかぶれな所作を想う様では、露伴の文学者としての資質さえも疑いたくたるとような気持を抱かれました。私にはこの言葉からは中世の猛ましい戦国の死斗を念頭において行動する武人の姿しか想像できず、余りかけ離れた露伴の解釈に、自分の抱く考ええまっとうなものかどうかをうたがいたくなる疑念さえ生じたほどでした。そこで私はこの「思ひ切たる死にぐるひ」という言葉にどこまでもこだわりの、私の手の届く限りの古注・新注に当って検証することになりました。その頃はまだ、天野雨山の『猿蓑連句評釈』は出版されていず、私が当った注釈書の中で、私の注意を惹いた古注が一つありました。それは岡野湖中の著した『俳諧蕉羽集』(文政九年)の次の条です。「頭をかき散しといふより転じて来て兜下地の髪と思ひよせたり。忍びの緒きりたる討死の立。村上彦四郎、毛受勝助などの佛也。」(勝峯晋風編)でありました。

そこで、私は湖中の挙げた村上彦四郎や毛受勝助という人物がわかれば「思ひ切たる死ぐるひ」という言葉の具体的な意味もわかるのではないか。この言葉がどの様に使われていたかがわかれば、この句の人物も自から判明し、露伴説に決着がつけられるであろう。それには先ず、右両人の行実を調べることがこの句を解明する鍵であると考えた。

ところが不思議にも、新注の中にこの湖中の「村上彦四郎・毛受勝助の佛」という言葉に注意を払ったものの全くないことを知ってむしろ私の方が驚いた。湖中の注釈は近代の注釈者からは誰からも全く顧みられず無視されていたのである。そこで私自身が両人の調査から始めることにした。村上彦四郎というのは何処かで聞き覚えのある名である。「太平記」に出てくる村上義光とおよその見当をつけて調べて見ると、これは見事に適中した。吉野山藏王堂の本陣で北条勢の包囲の中から護良親王を脱出させるために、自から着用する物具、鎧を脱ぎ親王のものに取替え、親王の身替りとなり大勢の敵前で壮絶な最期をとげた南朝の忠臣である。

次の毛受勝助となると何時ごろの人物で、何処でどんな働きをした人か全く五里霧中で、その人の名さえ聞いた覚えもなく、何処から手を付けてよいやら全く見当もつかず、その上一番困ったことは肝心の「毛受」という姓の読み方がわからぬことで、これでは人名辞典からもこの人物を探し出すことの不可能なことを悟った。そこで早速図書館へ行き、『難読奇姓辞典』という最適の本を見つけた。この本のお蔭で、「毛受」という姓には、メンジヨ、メンジユ、メンケ、メンゾー、モズなどという読み方のあることを知った。そして人名辞典からやと目的の「めんじゅかつすけ」なる人物の名を探し出すことができた。

毛受勝助は『太閤記』や『豊鑑』にも出てくる人で、柴田勝家に仕える武士で、村上彦四郎よりおよそ二五〇年許

り後の時代の人であった。本能寺の変（一五八二）で織田信長が亡くなり、光秀が秀吉に平らげられ、天下は、信長の重臣の柴田勝家と新興勢力の秀吉の後継争いとなった。この争いが表面化したのが翌天正十一年の賤ヶ岳の合戦である。この合戦は柴田勢に属する前田勢の離反により秀吉方に優利となり、勝家は秀吉勢に追われることになり、越前北の庄に後退を余儀なくされた。勝家が自国に敗退する際、主君の身替りとなり踏み止まり、秀吉軍をあざむくため、勝家の馬標を貰い受け、若くして玉砕して散ったのが毛受勝助である。

こう見てくると水戸藩士であり、芭蕉全集『俳諧一葉集』（文政十年）を初めて完成した、真摯な芭蕉研究者、岡野湖中はこの「思ひ切ったる死ぐるひ」という言葉から南朝方の村上彦四郎や柴田勝家の家臣毛受勝助という主君のために一身を投げ出して散った中世の戦国武人を想い、この史邦の付句の主人公を男性と解したことは明白である。兩山もその評釈の中で、「この附句を以って、前句の女の物狂はしき状と誤り解し、七句目のハうき人以下四句すべて女の上なりとし、ハ畢竟一句の仕立にのみ苦心して、枝折の工夫未到らざるよりは是の如きを致せるなり」となす如き先註がある。大才芭蕉の捌きを見誤って、神技とも称すべき念々粉骨の作を批難したのは、その因、前句を打越に對するハその人Vの附と誤解した僅かな蹉跌に原づくのであるが、運移の技法などへの通・不通が、如何に意外な結果を齎すかを語る一例とせられるであらう」と露伴説の不

籠タルガコハサニ、内へ切テ入ントスル者モ無ケル處ニ、……」史邦の付句にびったり符合するような記事である。私は早速、当時（昭和五十一年）知遇を得ていて、奈良へ転居する前に住んでいた宝塚市の逆瀬川から近い、西宮市の仁川にお住いの甲南大学名誉教授伊藤正雄先生にこのことを御報告した御手紙をさし上げた。伊藤先生の「心中天の網鳥詳解」（昭和十年刊）は、私の若い頃読んだ最も感銘を受けた良書の一つで、それ以来伊藤先生の名は深く私の頭に刻み込まれていた。その先生が昭和五十一年『俳諧芭蕉連句全解』を出版されたので、当時私には最も信頼のおける芭蕉連句の注釈書として位置づけられ、私のささやかな発見を先ず御報告中上げるのは伊藤先生をおいてほかにないと思った。先生からは折返し御返事を頂き、史邦の付句が『太平記』の巻一の記事を踏まえたことは従来の研究書に見えない新しい発見であるので、何時かの機会をとらえこのことを紹介しようという御趣旨が記されていた。伊藤先生は私が法隆寺に住んでいるところから、或る程度年をとった僧侶のような人物に思われていられたことが、後日伊藤先生をお尋ねしたときのお話から窺えた。伊藤先生はお約束通り、昭和五十二年、甲南大学紀要、文学編29に『芭蕉連句全解』の補正を記され、その中に「二四七頁『おもひ切たる死ぐるひ見よ』の解釈を左の如く訂正する」として史邦の付句を『太平記』の記事を踏えたものであらうとし、私からの通知に對する御丁寧なる謝辞まで記されていたことには大変恐縮した。この補正版に『冬の日』

当を柔かく批難している。そして、凡兆の前句は、去來の打越の「いまや別の刀さし出す」の女性の向付として、刀を受けとり、女に送り出される男性を描いた句で、句中に「櫛でかしらをかきちらし」とあるので、女性の仕草とまざらわしいが、この運びを仔細に点検すれば、史邦の付句は、前句の凡兆の描いた男性その人の様を描いた人情自の句と見るのが妥当な解釈であることは兩山も指適する通りで、史邦の付句は前句の男性その人の決意を描いた句と見なければこの三句の涉りの首尾は一貫しないことになる。

この辺の付け運びの面白さ、転じの妙は連句特有の楽しさで、江戸期から逆茂木と称され、障害物を引のけ、乗り越えて前進を続ける最大の見せ場であることは前述の通りである。

ところで、私はこの「思ひ切たる死ぐるひ」という言葉は恐らく中世軍記物の世界に出てくるものであろう。きつと『太平記』などに出てくるに違いない用語であろうと見当を付け調べている中に「死狂い」という用語例は、『源平盛衰記』『平家物語』などにも出てくるが、『太平記』には屢々見える常套語のように思えたので、「思ひ切たる」と「死ぐるひ」とが一緒に出て来る用例はないものかと、ひまにまかせて、『太平記』を初めから読みはじめた。私のこの予想は見事に適中して、意外なほど早く、私の目ざした用語例が発見できたときの喜びと驚きは、文字通り私を有頂点にさせた。それは『太平記』巻一、「頼員回忠事」の条に見出せた。「思ひ切タル者ドモガ、死狂ヲセント引

の「有明の主水」に関する俳誌『獅子吼』掲載の（昭和五十二年二月号）東明雅先生の御論考についての伊藤先生の御紹介と論評を拝見し、その時初めて明雅先生の七部集御研究のことを知り、昭和五十三年の中公新書の『連句入門』の広告を見たときには胸を踊らせた。東先生の『連句入門』が出版されたころの五十三年の七月廿日に伊藤先生が七十七歳で逝去されたことを新聞紙上で知りました。

「思ひ切たる死ぐるひ」に関する伊藤先生の『太平記』を踏えた句であるという御紹介があって以降「鶯の羽も」の巻に関し記されたものの中、この句を『太平記』の影響をうけたと認められるものを参考までに次に列挙しておきます。

- ① 昭和五十五年刊、岩波書店「文学」第四十八卷第三号掲載、山本健吉「余吾の海・路通・芭蕉」（エッセイ）に、『太平記』一、「頼員回忠事」の「思ひ切ツタル者ドモガ、死狂セント」を引用し、「ことにこの用例を引出したかと思われるほど、符合している。」
- ② 昭和五十八年刊、阿部正美『芭蕉連句抄』第八篇、「この付句の表現に影響したかどうか、後考に備へて書留めておきたい。」
- ③ 昭和五十九年刊、小学館版日本の古典、『芭蕉句集』連句篇、中村俊定、堀切実評註に「一説に『太平記』巻一「頼員回忠事」の中の「思切タル者ドモガ、死狂ヲセント引籠タルガコハサニ……」という多治見一党の決死の出陣の体の故事付という。」

私は伊藤正雄先生を介して、東明雅先生の知遇を得られたことを大変奇遇に思い、心より両先生との出逢いを私の生涯の大きな出来事と大切にしております。伊藤先生が昭和二年、東先生が昭和十四年、十二年のへだたりがありますが共に東京帝國大學の国文学科に学ばれ特に近世文学を専攻された奇しき縁を想い、ひとしお深い思いを感じます。尚大先学幸田露伴翁の七部集評釈に対しては常々敬意を

忘れませんが、連句評釈に対し若輩の後学者が生意気なことを口にし、にがにがしく感ぜられる向もあることと思いますが、私がこうした駄文を草することができるとも一重に先学者、先導者がふみかためられた道があったので、また良き指導者にめぐり逢うことが出来たこともその学恩の一つとして決して忘却してはいけないことを一言申し添えておきたい思います。  
(一九九〇・一・末)

## 「鳶の羽も」の巻 鑑賞 (Ⅷ)

東明雅

24

瘦骨のまだ起直る力なき

隣をかりて車引こむ

(雑。人情自他半)

凡兆

(現代語訳) 長患いでまだ起直ることもできない病人を見舞いに行かれたが、家が狭くて牛車も入ることができないので、隣りの門の内をしばらく借用して車を引き入れる。(付心) 向付(病人と車に乗った人とを向いあわせて出している)。面影の付(「源氏物語」夕顔の巻。詳細は補説で説明する)。

(付味) 心付(前句と付句とが意味の上でつながりあうもの)で、特に気分・情調の通いあうものはない。「芭蕉連句全解」で伊藤正雄氏は「起直る力なき」の不自由さが、「隣をかりて車引こむ」の窮屈さに響いていると指摘されたが、果していかげなものであるうか。  
(転じ) 打越は、ほととぎすが鳴かなくなったという寂寥感を叙べただけの句であるがこの付句は面影付として、はるかに「源氏物語」の世界へ転じている。これは一巻の模様の上からも大きな転じであり、前句の「瘦骨の……」の句を受けていよいよ、この巻のいわゆるヤマ場を迎える

ことになる。

(補説) 浪化宛去来書簡には次のように書かれている。「『さるみの集』に、『源氏』を下心にふくみたる句(御

ざ候よし、被仰下候。成ほど御目利の通りに、

『隣をかりて』は夕がほ

『待人いれし』はひたちのみや

を存じよせ候句ども、処々に御さ候。御らん可被遊候。」

これによって、源氏物語夕顔の巻の面影であることははっきりしている。しかし、夕顔の巻をそっくりそのまま取り入れているわけではない。光源氏は幼いころ世話になつた大貳の乳母が病になり五条あたりの家に引籠っているのを見舞に行く、しかし、御車を入れるべき門が鎖してあったので、門の開くのを待つ間、はからずも隣の夕顔の花咲く家に若い女性が住んでいるのをかいまみ、夕顔の花にとよせてやりとりがあり、その後、隣りの若い女あるじ(夕顔上)との恋愛が発展するというのが大体の筋であるが、そこには「隣をかりて車を引こむ」のような事実はない。これを以て句を付申候事御さ候。此は、古人の仕たる事を、そちがひ申候。たとへば、書にも文にもかつてなき事にて、その人の風勢かならず如此なるべき事をおもひよせて仕候」と言っているが、このように「源氏物語」の筋と、この付句の内容の相違は、故事取りの付け方と面影付の付け方の相違になるのである。

この句は確かに「恋の呼び出し」(次の付句に恋句を期待し、それを出やすくする句)の句と言うことができるであろうが、それ自身、恋句ではない。

25

隣をかりて車引こむ

うき人を枳殻垣よりくぐらせん

(雑。恋。人情自他半)

芭蕉

(現代語訳) 久しく見えなかつた恋人が来て、隣をかりて車を引きこんだ。女はあの薄情な男はいっせしめ出して、枳殻垣をくぐらせ痛い目をみせて、思い知らせてやろうとすねている。

(付心) 前句は隣に車を引こむ男。付句は門を閉じて枳殻垣から男を潜らせようとする女。この二つが向いあわせられている「向付」。この句についても「源氏物語」の浮舟の巻、あるいは同じ夕顔の巻に出てくる六条御息所の面影と見る説もあるが、打越から三句同じ「源氏物語」の面影付ということはあり得ない。

(付味) 前句の「車」は牛車であるうし、枳殻垣は貴族の邸であろう。だから、その点で位の付でもある。しかし、その「引こむ」という表現は、何か烈しいものがあり、これに対する「垣よりくぐらせん」にも、平常とは異なるものがある。これは響であり、位の付の調和したものの中に、響きあうものが含まれている。

(転じ) 打越の病態から、これは激しい恋句へと、人物

・境涯・気分ともに一転している。

(補説) うき人は憂き人。薄情な恋人。枳殻垣はからたち(枸橘)を植え並べた垣。そして、枳殻というものの意味は、「芭蕉翁付合集評注」に言っている通り、「さるに垣は竹の垣とも柴の垣ともすべきを、ことにくぐりがたき枳殻垣をくぐらせたるにて、恋のせつなる情みえたり。かつはうき人といふ事によくひびきたり。まことに、翁の恋句にいたりては、さらに人意の及ぶべき所にあらざ」と言っている通りで、枳殻のとげとげした針は、まさに女性すべての瞋恚の象徴なのである。

ところで、この付合は表面では僅かなことしか述べていないが、この情事の始終を想像してみると相当複雑な内容が思いうかべられる。まず、女から閉め出しをくった男はそのあとどうしただろう。それに対して女はいつまでも門を閉じたままだったろうか。どうもそうではなさそうなので、何時、どんなきっかけで門を開け、その後どうなったかなど考えて行くと、優に一篇の小説ぐらいのものがこめられている。そんな複雑なものをこの短い句で描き出し、しかも女性一般に共通するものを枳殻のイメージで象徴したところに、この句のすばらしさがあろう。

26

うき人を枳殻垣よりくぐらせん

いまや別の刀さし出す

(雑。恋。人情自他半)

去来

的でおもしろいけれども、そこまで言わなくても、打越・前句の世界からの転換は十分にされていることであり、もともと、作者の去来はあまり芝居気のある人ではなかったようであるから、まず、普通の若い武士と、その愛人との別れの間と見てよいであろう。

27

いまや別の刀さし出す

せはしげに櫛でかしらをかきちらし

凡兆

(雑。恋。人情他)

(現代語訳) 遊里の朝帰りである。遊女が客を見送って刀を差し出すと、客はそれを受け取り、大あわてで髪に櫛を入れて帰ってゆく。

(付心) 向付。刀をさし出している女に対して、櫛で髪をかきちらす男を向いあわせたものと見たが、其人の付、即ち付句の主人公を女性と見る説もある。

女性説を取る根拠としては、櫛というものは元来、女性の用具である。ことに「かきちらす」というのは、「せはしく心いらだちたる女の姿」と見て、「海道又は山道の旅泊のおじゃれ飯盛」などの様とする説が圧倒的に多い。

けれども、この句を其人の付、すなわち、女性の姿を描いた句とすると、うき人を枳殻垣からくぐらせる人も、刀さし出す人も、櫛でかしらをかきちらす人も、全く同一の女となつて、俳諧に最も重要な「三句の転じ」がなくなつてしまう。それではまずいのである。

(現代語訳) 夜が明けるので枳殻垣を潜らせて恋人を帰さねばならぬ。女は名残を惜しみながら今や刀を渡してやる。

(付心) 其人の付。愛人をこれから垣根をくぐらせて帰そうと考えている人の動作を付けたものである。

(付味) 前句・付句ともに緊張した表現である。「七部十寸鏡猿蓑解」は、「刀さし出すと言ふ語声つよく、前のうき人と云る人ののり(調子を合はず意)也」と言っている。

(転じ) 打越・前句の古典的世界から、当代の武家の男女の逢引の場となり、前は恋人の来る景を、今度は帰りの景に見立替をしている。その時刻も前は宵または夜半であったのに、これは後朝で、枳殻の棘も前においては、それを潜らせる女性の瞋恚の象徴であったが、この前句と付句とは、垣の外のみびしい周囲の眼、あるいは世間の眼の象徴になっている。このように、あらゆる点ですばらしい転じが行なわれている。

(補説) この句に対しては、その解釈・鑑賞にいろいろの異説がある。まず、この刀をさし出す人を女性ではなくて、男性と見る説もあるが、刀を帯るのは男性だから、この説は受け取りがたい。

さらに、枳殻垣を潜らせるということに、何かただならぬ気配も感じられ、それに応じて急迫した気分が付句「いまや別の」にひそんでいる。だから、「俳諧古集之弁」には「落人などかくまひ置く女の館へ、捕手の向へる風情ともみゆ」とあり、これに賛成する学者も多い。いかにも劇

この点、男性説を採用すれば「三句の転じ」ははっきりする。西鶴の浮世草子などを読むと、当時の男性が櫛をもつたり、使つたりする場面がしばしば現われる。その一つの例として、「好色一代女」の次の文が参考になるのではなからうか。それは巻一ノ四「淫婦の美形」の一節、前の晩太夫から振られた客の朝帰りの状態を描いたところである。

かさねて寄添ふ言葉もなく、残念ながら人並に起別れて、髪を茶筌にほどき、帯を仕直し、分立てたるやうに見せけるこそをかしけれ

「分立てたるやうに」とは、前夜、遊女との間に情交があったかのように人に見せるため、乱れてもいない髪をこどさらほどこいて茶筌髪にし、また帯も締め直して見せるのである。この話を逆にかえせば、遊女にもてた男ほど朝髪が乱れていたわけである。だから、大急ぎで帰ろうとする場合、遊女から櫛を借りてあわててなんとか形を付けようとする。その有様を「かきちらし」と言ったのである。「かきちらし」の「ちらし」は動作の荒々しいさまで、いかにも朝帰りの男のあわてふためいた姿が、この言葉にあられておもしろく、これをたとえば「せはしげに櫛でかしらをととのへて」とか、「せはしげに櫛でかしらをかきなでて」などとしたら、この味は忽ちに失せてしまうだろう。

(付味・転じ・補説) それぞれ、付心の項で説明した通りである。

葦虫

付勝練習二十韻

東明雅

切日 20月 7日

十句目 すこし疲れて美術館出る  
十一句目見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく  
十二句目

治定 客待つ暖炉あかあかと燃え

1 こどもの列に従く親の列

2 ラガイスクラム一塊となり

3 印つきたる助手席の地図

4 寒三日月はいつか消え失せ

5 寒影向ひあうて暮敵

6 切って放てし鷹匠が鷹

7 頭剃り立て冬安居僧

8 黄金の屏風銀の月

9 煉炭あぐる焰むらさき

10 パートタイムの人を面接

11 糸編みつつ物思ふ人

12 母娘二人で守り来し機

13 時々腰を伸す紙漣

14 狸必死に呪文となふる

正雄 鋭太郎

達子 鋭太郎

元子 健悟

美和 智子

隆秀 徹

美代子 謙太郎

あかり 雄次郎

典子 雅代

澄子 典子

15 鶏雑炊をせがむ子供等  
16 夫婦の味は湯豆腐の味  
17 頬を真赤に押しくらまんじゅう

千雪 道郎  
淳子

(応募受付順)

1 幼稚園か小学校の遠足を思わせる。子供を詠んだのは一つの目のつけ所だが、打越に「美術館出る」があるから、これは歩行体の打越であろう。2 前句の何かささまじい迫力が移っている。響きの付けの好例であろう。転じも付味も上々であるが、前三句が外の景であるので、なるべくなら今度は室内の景を付けたいのである。3 これは自動車の助手席の光景とすれば、一応内の景と見てよいであろう。よく付いてはいるが、転じの点はいかがであるか。4 この巻初折の月は早々と第三で出てしまった。折が変わって前句が冬季だから、ここで冬の月を出すというのは、最も願わしいことである。しかし、前句に「雪しまく」(降雪に強い風の吹き添う現象)が付いているために、普通の月は出せず、ここが苦心されたところだと思ふ。それでも前句にびったりの句が出来たが、打越の疲れた沈んだ気分からは一転し得ていないのが残念であった。5 外は摩耶山の雪しまき、室内では寒々とした室に黙々と鳥鷺を戦わす二人、この句も付味は悪くないのであるが、打越の暗い気分が残っているようである。ここはやはりもっと明るい句を付けた方がよいと思う。6 この句も2と同じく、響の付けであろう。そう言えば、「猿蓑」の「灰※

※汁桶の」の巻に、「乗出して肱に余る春の駒」「摩耶が高根に雲のかゝれる」という付合があったことを思い出した。「切って放てし鷹匠が鷹」は「春の駒」の句に匹敵する力のある句で、付味も転じも十分である。ただ外の句である点がやや惜しいのは2と同様である。7 「冬安居」は仏教徒が冬、一定期間、坐禅・仏書研究などの修行を行なうことで、それも若々しい僧らしいだけに、前句との付味・転じも十分であろう。ただ、三句前に「回教国は…」の句があり、これもやや釈教くさいのと、その句から人情の句が三・四句続き、この句を採用して、人情の句を続けると何かこたごたした感じになりはしないかと、それを恐れて結局捨てることにしたが、残念であった。8 これも何とかして冬の月を、室内で出せないものかと苦労された句である。しかし、前句との付味はいささか問題があり、さらに、豪華な屏風は打越の美術館にさわるであろう。9 煉炭の焰の紫は美しいけれども、摩耶という地名と煉炭とはいささか位が違ふように思う。この焰はやはり何か世帯じみていて打越の気分からも転じないだろう。10 これは人情自他半の句である。だから十句目の自の打越にはならない。しかし、7で言った通り、この人情の句は一句で終らず、たとえこの次に恋句でも来ると、何か人情の句がぞろぞろ続く可能性が出てくる予感がある。人情の句を続けることが一概に悪いと言っているわけではない。抜きさしならぬ人情の句の連続は、例の逆茂木として賞められるだろう。この場合、人情を続ける必然性がやや乏しいの

ではあるまいか。11 早速恋の句であるが初折でも同じ所が恋句になっているから、この場合は避けたいのである。12 この句は恋句とは言えないかも知れない。おもしろいよい句であるが、これももっと先になってから出したい句である。13 紙漣は冬の季語、人情他で室内の景と詠向きであるが、「腰を伸す」はやはり疲れを感じているからである。打越の「すこし疲れて」と差し合う。14 「昔は山に狐も狸も猪もいました。六甲山系にも随分沢山いました。木のうろや横穴に降りしきる雪が恐いのでおびえて呪文となえている狸の姿です。ずうっと真面目な句が続き俳諧の諧を入れたいと思いましたが」とお葉書にあり、私は読んで思わず吹き出してしまった。御趣旨はよく分り、狸もおもしろいが、おびえて呪文を唱えている姿は滑稽でもあるが、あわれでもあり、打越の気分から全く一転とはいかないであろう。15 子供を出されたのはおもしろかったし、三冬で室内で人情他で万事そつはないのであるが、このあとの展開が問題であろう。16は11と同じ、恋の句はもっと後に出す方がよいと思う。17 「そろそろ子供を出し度いと思いました。他とも人情薄で場でもよろしいと存じまして」とお葉書にあった。子供を狙って出されたのは流石ベテランであるが、これは場の句にはならないでしょう。治定の句、三冬の場の句、室内と条件が揃い、付味・転じともに上々である。一句この場の句を挿んで、さらに新しい気分が続けていただきたい。次は雑の句、人情他・自他半・場、いずれでもよい。恋の句でもよい。



# 亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第三十三回 猫蓑会

第三十三回猫蓑会は四月二十六日(木)、江東区亀戸天神社事務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行、奉納し、そのあと、二十韻八巻を首尾した。

第一部 正式俳諧興行 「藤房や」一巻

第二部 二十韻八巻

(一) 役割

宗匠	中川 哲
脇宗匠	中島 啓
副宗匠	福井 隆秀
執筆	式田 和子
知司	豊田 好敏
副知司	副島 久美子
座配	内田 麻子
座見	山下 元子
花司	山崎 千恵
配硯	梅田 利子
配硯	若尾 よしえ
老長	杉江 杉亭

(二) 次第

- 一 席改め
- 二 席入り
- 三 配硯
- 四 献花
- 五 執筆登場
- 六 文台捌
- 七 知司挨拶
- 八 俳諧興行
- 九 花前
- 十 玉串奉献
- 十一 花の句披露
- 十二 端作り
- 十三 吟声
- 十四 文台返し
- 十五 作品奉納
- 十六 知司挨拶
- 十七 退席

## 二十韻 藤房や

藤房や菅公五才のみづら髪  
太鼓橋より亀の鳴く声  
めかり時小半の酒たしなみて  
ぼつりぼつりとファミコンを打つ  
弦月のはや中天にビルの窓  
誘ふ上司を拒む秋寒  
べつたらの市で逢ふたが運のつき  
左へ行こか右へゆこか  
円安をとめる手だては難しく  
デロスのとかげペロリ舌出す  
ハンモック子はすやすやとうまゐして  
樵の斧に木の香残れる  
恋といふこと知りそめて縫ふ襦袢  
異母兄妹と聞いてどうする  
大白鳥ゆうゆうよぎる月天心  
終の栖は村のはづれか  
りハビリの誉められてをり夢の中  
焼きおにぎりに醬油たっぷり  
彌勒仏微笑給ふ花の陰  
遠き山より春の暮れゆく

千町 正江 明雅 清子 麻子 好敏 杉亭 弘子 久美子 啓世 淳子 文子 健悟 淑子 徒司 澄子 守男 執筆

## 照れっぱなしの「宗匠」役 中川 哲

「柄(がら)にない」とか「舞台(いた)につかない」を絵に描いてしまったさまの宗匠役で、ひたすらお恥しい限りでした。昨年の芭蕉庵のときは、まだしも猫蓑会内輪の心易さがありましたけれど、亀戸天神への奉納正式俳諧興行のプレッシャーがかかりました。能の「翁」でいえば、三番叟にあたる執筆には儀式を敬仰する典雅性と軽みの演技を楽しめる遊戯性みたいなものがありますけれど、宗匠は「翁」役です。柄と貫禄で一座を締める、束ねの大役でしょう。一夜仕立てで勤めるのは、それこそ天神様の罰を蒙る怖れがあります。莊厳にしつらえられた会場に、連衆が着座し、執筆、知司、花司のほか玉串奉献の神官さんまでが居すまいを正されるなかへ、座配の麻子さんに導かれての「席入り」では足が震える思いでした。そのくせ、頭の中では「菅原伝授手習鑑」二段目「道明寺」の「なんと丞相、偽丞相」みたいな自嘲のセリフが勝手に渦巻いていたのです。自分のテレを、自分でごまかす裏返しのカタルシス作用かもしれません。

玉串奉献のあと、花の句を執筆の和子お姉さまに差し出したところで、ほっと一息。心のなかに、別の花の句が浮びました。  
神罰を畏れぬわれや花の酔ひ  
兎にも角にも、身丈に合わぬ宗匠役で、照れっぱなしの  
一時間。終ったあとの二十韻では本当に酔がまわりました。

藤祭り

東 明雅 捌

藤房の

金久保淑子 捌

藤まつり

馬場 彬風 捌

一降りの雨に浄めて藤祭り  
 春惜しみつつ集ふ俳徒  
 燕の巢老舗守る主健かに  
 甘さ好みの手作りの味  
 髪洗ふ窓に大きな月の出て  
 ニアミス承知隣女房  
 お馴染のバーのマダムも五六人  
 鉄鋼造船陽の目見え出す  
 念願の領土返還いつの日か  
 テレビゲームに夢中なる子ら  
 河豚ちりに晩酌の父上きげん  
 炬燵の猫がのぼせたと云ふ  
 背を向けて触れて触れざる床のなか  
 憤然としてガールフレンド  
 居待月漸くのぼる無人駅  
 大和国原秋風のうち  
 身に入むや古寺巡礼も半世紀  
 舌になれ来しコピイ食品  
 席占めて落語の花見賑かに  
 根雪の消えて土の香れる

明雅 藤房のもつる風や池小波  
 則子 蝸蚪を掬ひて遊ぶ子供等  
 志紅 春炬燵文房四宝とり出して  
 治子 軒場近くに自転車ベル  
 守男 虹残る山並にはや月昇り  
 則 更衣して胸のふくよか  
 男 地廻りに冷かされるが愉しみて  
 則 ちよつと移ったハチ公の像  
 紅 選ばれし宇宙飛行士夢多く  
 治 いとよりの鮎庵の注文  
 同 底冷えの木曾路で買ひし「七笑」  
 同 社務所で習ふお神楽の振  
 同 碧い瞳に黒目がからみ肩が寄り  
 男 「金瓶梅」の手練手管を  
 同 高速のカーブミラーに映る月  
 治 初雁の群が下りくる  
 紅 秋深く老絵師芸に掛くる魂  
 雅 木槌で叩く軽き腰痛  
 紅 火を入るる花びらの舞ふ登り窯  
 則 遍路の鈴の遠ざかる道  
 男

淑子 俳諧の古式床しや藤まつり  
 好敏 春の日傘のゆるる池の面  
 郁子 はらみ鹿手まねきすればうす目にて  
 哲 石けりの子の独り遊べる  
 ますみ 月涼しベッドタウンの屋根の上  
 美奈子 冷房の間で電話待つ宵  
 哲 あの人の噂なんかは信じない  
 敏 男はロマン女ロマン  
 敏 宝くじ有楽町の列長く  
 哲 早合点はお家芸なる  
 奈 日米の構造協議ままならず  
 敏 臘八接心寺は深閑  
 奈 西鶴は五十二才で逝きにけり  
 哲 露けき野辺に誘ふ口づけ  
 敏 禁断の木の実を食べた月の夜  
 奈 駅のホームをすぎる秋風  
 同 エーゲ海翡翠の色の汐満ちて  
 同 袋より出すかん入りの酒  
 敏 花の房愛でつながらめつ八重桜  
 み 幼稚園よりのぼる風船

藤の盛り

篠原 達子 捌

藤祭り

蒲原志げ子 捌

藤祭り

八角 澄子 捌

匂ひ立つ藤の盛りや太鼓橋  
 そぞろ歩きの春惜しむ人  
 つぶらなる瞳の仔猫もらひ来て  
 読書に倦みて淹れしコーヒ  
 蚊遣香渦ときほぐす宵の月  
 小唄をうなる甚平の客  
 ずっこけもつじつま合はせ娘の世帯  
 年下の彼家事が得意で  
 NHK「翔ぶが如く」を見なくっちゃ  
 木曾「七笑」急便で着く  
 重文のお寺にさがる繭団子  
 ひびあかがりのお手伝ひさん  
 若先生こんなところで困ります  
 妻には愛のマグム年金  
 ふるさとの月のかなたの渡り鳥  
 秋場所終へて綱に昇進  
 三枚におろすたちうを活きのよき  
 初孫生まれ知りそむる齡  
 渋滞の高速道路花明り  
 煙草くゆらすうらかな午後

達子 藤祭り押されて渡る太鼓橋  
 清子 春の日傘を肩にお詣り  
 光子 八朔をむきたる指の染まるらん  
 隆秀 磨きこまれた低いテーブル  
 清 月の出に仏法僧も誘はれて  
 秀 陶の枕を抱きてうたたね  
 光 家もありお金もあるがうぶ過ぎる  
 清 コンピューターで探すお相手  
 秀 動く歯について舌のゆく電話口  
 清 政治家がらみ相場上げ下げ  
 光 大家族石狩鍋をつつき合ひ  
 秀 古き曆に残る書込み  
 達 壁に貼るマリリンモンロー悩しく  
 光 悪ぶっている彼が大好き  
 秀 新走りき酒の猪口置いて月  
 清 ガレージセール冬支度する  
 秀 かまへたる鎌の動かずいぼむしり  
 光 人気なき浜続く足跡  
 清 タンデム車山道行けば花吹雪  
 清 いなきき聞ゆ仔馬親馬

志げ子 むらさきの袴姿や藤祭り  
 久美子 調べゆかしく祝ふ春昼  
 和子 つばくらめ巡行船をよぎるらむ  
 一恵 焼饅頭でお茶をいっぶく  
 弘次 女どちお饒舌やんで望の月  
 雅代 誰が寝る間をつづれさせさせ  
 同 定家の忌式子が墓にからむ葛  
 美 ランバダグンス老も挑戦  
 和 反対の声もかすれし消費税  
 恵 なんのかんのと酒のあと引く  
 恵 かぜ気味の麒麟に長き貼り薬  
 代 名残りの空に気球ぼっかり  
 次 朝シャンの乾く間もなく抱かれて  
 次 嫦娥刺青羅に浮き  
 和 織ばたのはたと止りし浪の音  
 恵 思へば須臾に過ぎし半生  
 次 一億円夢の温泉掘り当てぬ  
 美 ぐるぐる廻せ古き地球儀  
 代 筑波山花の霞のやはらかに  
 弘 子等は並んでしゃぼん玉吹く

